

## すぎなみ地域大学&すぎなみ大人塾共同開催講演会

平成26年5月31日(土) 10時半—12時半

テーマ：「ユーモア革命～心をひらくコミュニケーション～」

講師・阿刀田高氏 於：セッション杉並

### 講演会に出席して

杉並区の区民生活部協働推進課と教育委員会生涯学習推進課社会教育センターが主催して、ユーモアの効用、笑いやユーモアが生まれる根源的な意義等についての講演を、すぎなみ地域大学&すぎなみ大人塾共同開催講演会として企画。講演を聞き終わった今は、来てよかったと大きな満足感を得ています。

阿刀田先生に触発されて言ってみると、講座参加者に、ちょっと脇目をする機会を作りなさい、といっているのではないのでしょうか。すぎなみ地域大学&すぎなみ大人塾の事業で、ちょっと脇目をする効用をいうなんて、可笑しい話ですが、これこそ阿刀田先生のおっしゃるユーモアの効用なのだと考えるのです。

長い人生を歩み、同じ生活、同じ人、同じ道ばかりをずっと使っていた者にとって、他の世界に行くのは全く考えもしないこと。たとえ、他の世界に興味があっても、一歩踏み出すのは大変に勇気がいります。それが、ふとしたきっかけによって、少しずつ変わっていく。私の場合は、落ちていた大人塾のチラシでした。こんなことで、人生は本当に変わるのだと思うと、なんだか面白く感じてしまいます。たった1枚のチラシで、興味をそそられ、実際に足を運んで講座に参加してみる。すると、今まで見えなかったことや人に気づくのです。

阿刀田先生は、繰り返しお話されていましたが、「ユーモアは笑いを生み出すだけではなくて、他の視点を与えてくれる。ユーモアがある人は、そんな余裕があるから笑いを生み出せる」。



## 1 笑いについて談

1) 笑いには、明るい、楽しい、嬉しいものから、きつい笑いまでいろいろあるが、笑いは、日本文化そのものと思われる。世界中の言語で比較すると、日本語は音の数が少ないという特徴があり、(カナ文字と音)ダク音を入れも、聞きわけることが出来る音が100音程度か。だから、同音異義語が多くあり、かけ言葉遊び等が親しまれて今日に続いている。和歌等にも見られるが、日本文化、芸術の域に届くものもあり、みなさんよくご承知の通りとのことでしょう。

2) 笑いのほかにユーモアという領域がある。

自分が逆境に入った際、自分の身を別の角度から冷静に見つめることが出来る。

人は物事に超越した自分をつくりだすことが出来る。こういう人の口からユーモアあふれる『一言』が生まれることがある。

ユーモアは自分の運命をどのようにして乗り越えるのか、その際のその心の営みから生まれるように思うと。

大人塾や地域大学は、杉並区としての、壮大なユーモアの仕掛けのように思えます。おそらく、他の視点を与えるというだけでは参加者は集まらないでしょう。何か面白さがあり、興味をそそられる、脇目を見させてくれる。そんな予感があるから、人が集まり、そこに集まった人たちが、新しい視点を与えてくれるのでしょう。

本日は、セシオン杉並で、すぎなみはじめの一步まつり～大人塾まつり 2014～があり、私もワークショップを体験したところ、大きな衝撃を覚えました。高齢者と呼ばれる同世代の人々が、いきいきと活動をしていること。他の世代と関わりあって、企画から始めていること。参加者たちのユーモアのあること。

阿刀田先生の講演を聞いてみて、腑に落ちた感じがします。そして、講演会だけではなく、おまつりを同時開催して展示やワークショップなど、脇道を用意しているところが、杉並区の社会教育の妙であると思えます。先輩方にお話を聞いてみたところ、やはりちょっと脇道を見る機会が、今の活動につながっているとのことでした。ある方は、駅前の街歩きに参加したところ、一緒に歩く人が違うだけで、これほど視点が変わるのかと驚いたと話されていました。また、店舗のゴミ箱を探してみたり、どんな声が聞こえるか聴覚を頼りに歩いてみたりと、歩くだけでも多くの変化を体験し、そのことが町の楽しさに繋がった。その話しぶりも、ユーモアが溢れています。無知は罪と評され、高齢者がモノを忘れるとボケたと言われる世の中で、自らが知らなかったことを面白く語れるのは、まぎれもなくユーモアだと思うのです。

ひとつのことを一生懸命追求していると、そことは関係ないところで恵みが偶然でてくる。これをセレンディピティ（求めずして思わぬ発見をする能力）と呼ぶそうです。日本語の「棚から牡丹餅」と似ているように聞こえますが、まったく別のモノ。偶然性は両者に共通していますが、セレンディピティは、懸命にひとつのことをやっていると、他のところで偶然報われる。棚から牡丹餅は、棚の下で待っているだけ。懸命さが無いのです。科学の発見や発明も、継

続的にひとつのことを打ち込んでいる時に、小さなきっかけでべつな発見が生まれたことが多いそうです。このきっかけを生み出すのが、脇目を見ること、つまりユーモアと阿刀田先生は教えてくれました。

「ひとつのことをずっとやっていくのも大切だけど、すこし周りのことに気づくと、セレンディピティが起きてくる。ちょっと横をみるには、ユーモア感覚を持つことです。真面目一辺倒では出来ません。わきへ目をそらすことが大切。もちろん、何かに集中してないで、脇目を見ているだけでは、何も起きませんよ。時折、わきを見るのが人生にとって大事ですし、人間関係を豊かにしてくれます。」

偶然、チラシを拾ったのもセレンディピティだったとも思え、人生の折り返しを過ぎたところで、脇道があるというお話を聞くと、毎日の生活も明るく感じるのです。

「棚から牡丹餅」を入力したところ、「田中ラボ保ち」と変換されました。田中さんは、いったいどんなラボを保っているのか？そんな想像をしてみると、些細な入力ミスでも可笑しみを覚えます。

平安の昔から日本人は言葉遊びが好きだったと、阿刀田先生のおっしゃるとおり、自らの入力ミスも楽しくなってしまう。これも、ユーモアの効能なのでしょう。別の視点で見ることが、笑いを生み出す。ユーモアから出る笑いは、可能性を感じさせます。『暗夜行路』の主人公も大山のご来光を見たときに、自然の美しさに感動して、自分の悩みがちっぽけに感じられて、別の考えを試みようと思えます。阿刀田先生も悩みをたくさん持っていらっしゃるようですが、宇宙の番組で宇宙の果ての話を知ると、悩みから少しだけ離れられる。悩みはどこまでいっても解決しないので、そこに巻き込まれるのではなく、新しい視点や立場から考えると、スツとする。世の中はこんなに良いことがあるのか、それに気づいただけで人生の見え方が変わってくる。

そう話す阿刀田先生は、悩みからすっかり解放されているように見えます。実際には悩んでいらっしゃっても、ユーモアのお蔭で、新しい視点が生まれるのは、人生にとって効果的なのではないでしょうか。

すぎなみ大人塾&地域大学は、行政主導の教育機関ではなく、区内に住む者に新しい視点と機会を提供している場なのだと確信しました。この大きなユーモアの場を作り上げてきた先人たちには感謝し、意志を受け継ぎながら、精一杯

人生の脇道を進んでいきたいと思っています。脇道の楽しさ、脇道に行ける可能性に気づかせてくれた今回の講演会の主催者と阿刀田先生に感謝をいたします。

取材：NPO 法人 生涯学習 知の市庭 東島信明